

る。

ふえを……兩食指を胸前にまとめ更に少しく左右に開く。

たたいて……足踏しつゝ兩食指にて太鼓を打つ如くす。

ふいて……兩手を口の右方へ左手の甲の前にし口に近

く右方へ、右手は甲を上指先きを前にして左手の右方に、笛を吹く如くして足踏す。

どこで……左足一步後へ兩手を左下方に流し。

ならして……右一步後へ兩手を右下方に流し。

ゐるのでせう……第一の終りと同じくす。

幼児に聞かせる囃

水谷年惠

牝雞と猫

牝雞が卵を抱いて、じつとおうちの中に坐つてゐました。

猫が戸のすき間からのぞいて、

「牝雞さん、一寸表へ遊びに出ませんか、空がよく晴れて、

雲雀が面白い歌を歌つてゐますよ、あなたの好きな青蟲

が、菜のはつばにたかつてゐますよ。一寸出てごらん。」

と言ひました。牝雞は、

「いゝえ、私は赤ちやん達が卵からかへるまでは表へなぞ

出ません。」

と言つて、あとは知らん顔をしてゐました。

何日かたつと、牝雞の抱いてゐた卵の中から、可愛らし

いひよつこが五羽も六羽も出て、ピヨ、ピヨ、ピヨと鳴いて、お母さんの牝雞のまはりで遊びました。

猫はまた戸のすき間からのぞいて、

「牝雞さん、赤ちやん達が可哀相だから、一寸表へ出しておやりなさい。表には赤ちやん達の好きなものがいっぱいありますよ。そして表は廣いんですよ。一寸出しておやりなさいな。」

と言つてすゝめました。牝雞は、

「表へ出さなくても、おうちの中へお茶でもお米でも何でも入れて貰つておますから困りはしませんよ。それに、おうちの中だつてこんなに廣いのですから、赤ちやん達はいくらでもはね廻れます。」

猫はいひよつこを一羽でもいゝからとつて食べたいと思つて、眼を光らせて見てをりました。

「猫のをぢさん、此處までお出で、ピヨ、ピヨ、ピヨ。」とひよつこ達は、皆で躍つて囀し立てゝ居ります。腹が立つて、腹が立つてたまりませんが、猫はどうすることも出来ません。すこゝと歸つていきました。

「いまいし。一つ卵を見つけて来よう。そして自分かへしてひよつこを食べることにしよう。」

と言つて、猫は卵を探しに出かけました。方々探して廻るうちに、お池の水際の所で、一つの卵を見付けました。それは蛇が産んでおいた卵でしたが、猫は雞の卵だと思ひ込んでしまひました。そして

「これはうまい、しめたぞ。」

と言つて、其の卵を自分のうちへ持つて来て、毎日抱いておました。

「今に可愛らしいひよつこが出たら食べてやらう。柔かくてどんなにうまいだらう。」

と舌なめづりして喜んでおました。

何日かたつと、抱いてゐた卵が動き出しました。

「ほら、お馳走さま。」

かう言つて、猫は卵の殻を破つて出て来るひよつこを待つておました。ところがどうせう。卵の殻を破つて出て来たのは、可愛らしいひよつこではなくて、一匹の蛇が這ひ出して来ました。

「やつ、これは大變、助けて——助けて——」
猫は一生懸命で逃げ出しました。

お爺さんと鼠

昔ある所にお爺さんがありました。そのお爺さんが田圃から歸つて來ると、道ばたの草の中で、チュウくくくと苦しさうな聲を出して鳴いてゐるものがありました。

「誰だえ、チュウくくと鳴いてゐるのは。」

かう言つてお爺さんは腰をかどめて、草の中へ手を入れて見ました。

「チュウくくく。」

と又悲しさうな聲をたてゝ鳴きました。お爺さんは草の中から、一匹の鼠をつまみ上げて、

「おやく、お前は足に怪我をしたね。」

と言ひました。鼠の前足には、何かで切つたやうな傷がありました。

「可哀相に、よし／＼、今藥を付けてやるよ。」

お爺さんは小さな貝殻にはいつた藥を、自分の指の先に附

けて、鼠の傷口へなすり込んでやりました。

「これでよい、／＼。今すぐによくなるよ。さあお歸り。」

とお爺さんはその鼠を草の中へ入れてやりました。

「チュウくくく、有難う／＼。」

鼠は嬉しさうに鳴いて、どこかへ行つてしまひました。

晩になつて、お爺さんが、

「どれ／＼、もう寝ようかな。」

と言つてゐる所へ、可愛らしい聲で、

「ごめん下さい。」

とはいつて來た人がありました。誰かと思つてお爺さんが出て見ると、それは／＼美しい女の人が、髪を島田に結つて、きれいな着物を着て立つてゐました。

「まあ、あなたさまは何處のお方でいらつしやいますか、

何の御用でこんな所へお出になりました。」

お爺さんはびつくりしてかう聞きました。すると女の人は、

「私は今日あなたに助けていたとききました鼠でございませう。お爺さん藥を付けて下さいまして有難うございませう。おかげ様で傷がすっかり直りました。御禮に御馳走

を致しますから、私のうちまで一寸お出で下さい。」
と言ひました。

「おや、さうでしたか、それでは遠慮なしにあげりませう。」

お爺さんは女に化けてゐる鼠のあとあら、喜んでついで行きました。暫く行くと、大きな門の前へ出ました。

「ほう、立派な門があるね、こんな所にこんな立派な門が何時の間に出來たのかな。」

お爺さんがひとり言を言つてびつくりしてゐると、

「お爺さん、此處が私のうちです。どうぞおはいり下さい」と女の人になつた鼠が言ひました。

二人の足音を聞つけた鼠たち、美しい女に化けたり、立派な男になつたりして、お爺さんをお迎へに出て來ました。

お庭のむかうに大きなお殿があつて、お殿の中の廣いお座敷にお馳走が一ぱいにならべてあります。お爺さんは座敷にあがつて、そのお馳走を食べはじめました。どの御馳走も、どの御馳走もおいしいものばかりで、お爺さんのほ

つべだがとれさうでした。

「あ、うまい。お、うまい。うまい、うまい。」
と言つて、お爺さんは澤山に澤山に食べました。

「お爺さん、これはお土産でございます。」

薬を附けて貰つた鼠が、大きなお盆の上、金銀珊瑚などの寶物を山盛りにして、お爺さんの前へ出しました。

「これは、みごとな寶物、遠慮なしに貰つて行きませう。」

とお爺さんはその寶物を風呂敷に包んでしよいました。

「お爺さん、私がお送り致します。一寸支度をして参りますから。」

と言つてその鼠は奥へはいて行きました。お爺さんはそのひまに一寸隣りの座敷をのぞいて見ました。すると、隣りの座敷には、今貰つたよりも、もつとくびかくした寶物が一ぱい積んでありました。

「ひやあ——、仰山な寶物だなあ——。」

お爺さんびつくりしてしまひました。そして其の寶物も少し欲しくなつて、

「ニヤアゴ、ニヤアゴ。」

と猫の鳴きまねをしました。すると大勢の鼠達は、ドタン、パタンと大騒ぎをはじめて、一匹残らず皆逃出していつてしまひました。お爺さんは、

「これはうまい」

と大喜びで、その座敷のピカ／＼した寶物を、兩方の袂へも、懐の中へも一ぱいに入れました。

「さあもう之でよい。」

と言つて、鼠の御殿を出しましたが、門がびつ／＼しやりしまつてゐて出られません。

「これは困つた。」

と言つて、お庭の中をぐる／＼廻つてゐる中に、小さな穴を見付けました。

「よし、此の穴から出てやらう。」

と、小さな穴の中へはいつて行きましたが、何處まで行つても地面の上へは出られません。地面の中をモク／＼、モク／＼歩いて行く中に豆腐屋さんのおうちの下までやつて來ました。

豆腐屋さんは、

「おや／＼、地面の下で何だかモク／＼やつてるよ、をかしいなあ。」

と言つて、熱い／＼お湯をモク／＼動いてゐる地面へザーツと流しました。すると、熱いお湯で柔かになつた地面が、むつくりとむくれあがつて、中から一人のお爺さんが出て來ました。

「あーあ、熱かつた、熱かつた。」

と言つて、お爺さんは頭をつるりとなでました。

お爺さんの頭は熱いお湯を浴びて、つる／＼に秀げてしまつて、毛が一本もなくなつてゐました。お爺さんはあまり慾が深かつたので頭が禿げたのでせう。